

霧島連山の硫黄岳が 1768 年以來、丁度 250 年ぶりに噴火

19日午後、宮崎・鹿児島県境にある霧島連山のえびの高原・硫黄山が噴火しました。硫黄山の噴火は1768年以來で、250年ぶりの事です。このため、気象庁は噴火警戒レベルを2(火口周辺規制)から3(入山規制)に引き上げました。

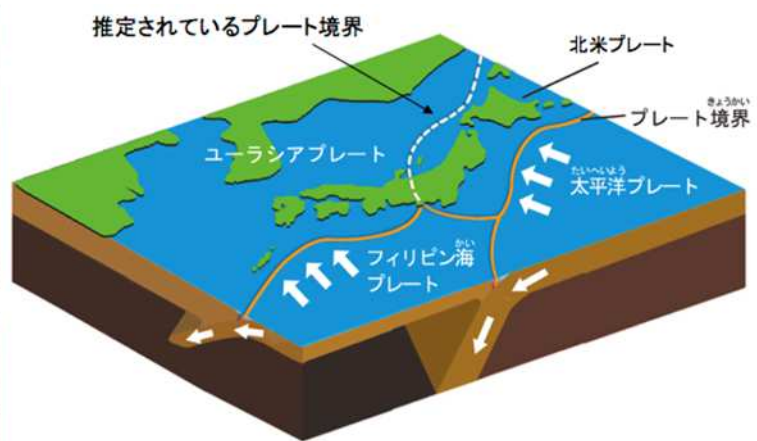
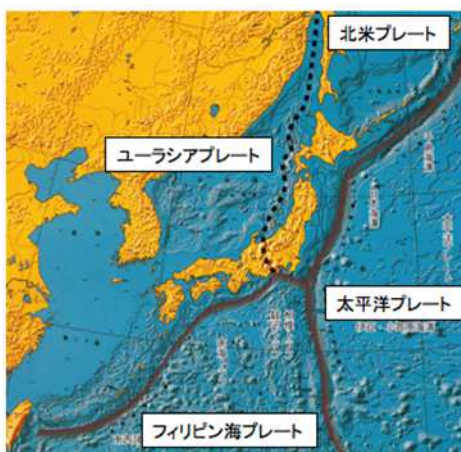
ゴールデンウィーク直前の噴火に地元観光業界はショックを受けています。日本の場合、火山はそのほとんどが観光地にもなっており、普段は温泉などを通じて火山の恵みを受けていますが、時にはこのような事件も発生するのです。幸い、現時点で噴火は小規模で、人的被害は出ておりません。霧島連山では新燃岳も噴火しており、火山活動が活発になっている事は確実です。

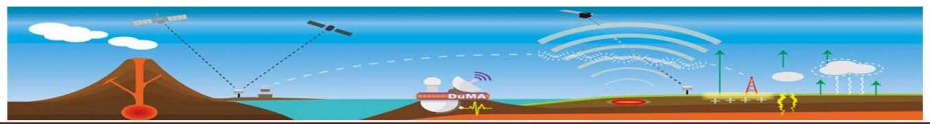
火山噴火予知連絡会会長の石原和弘・京都大名譽教授によれば、霧島連山では地下深部からのマグマの上昇が続いており、今回の噴火は2011年の新燃岳の噴火から一連の流れにあるものと考えられるそうです。霧島連山全体の火山活動については数年スケールで注意が必要とコメントされています。

首都圏の地下天気図®

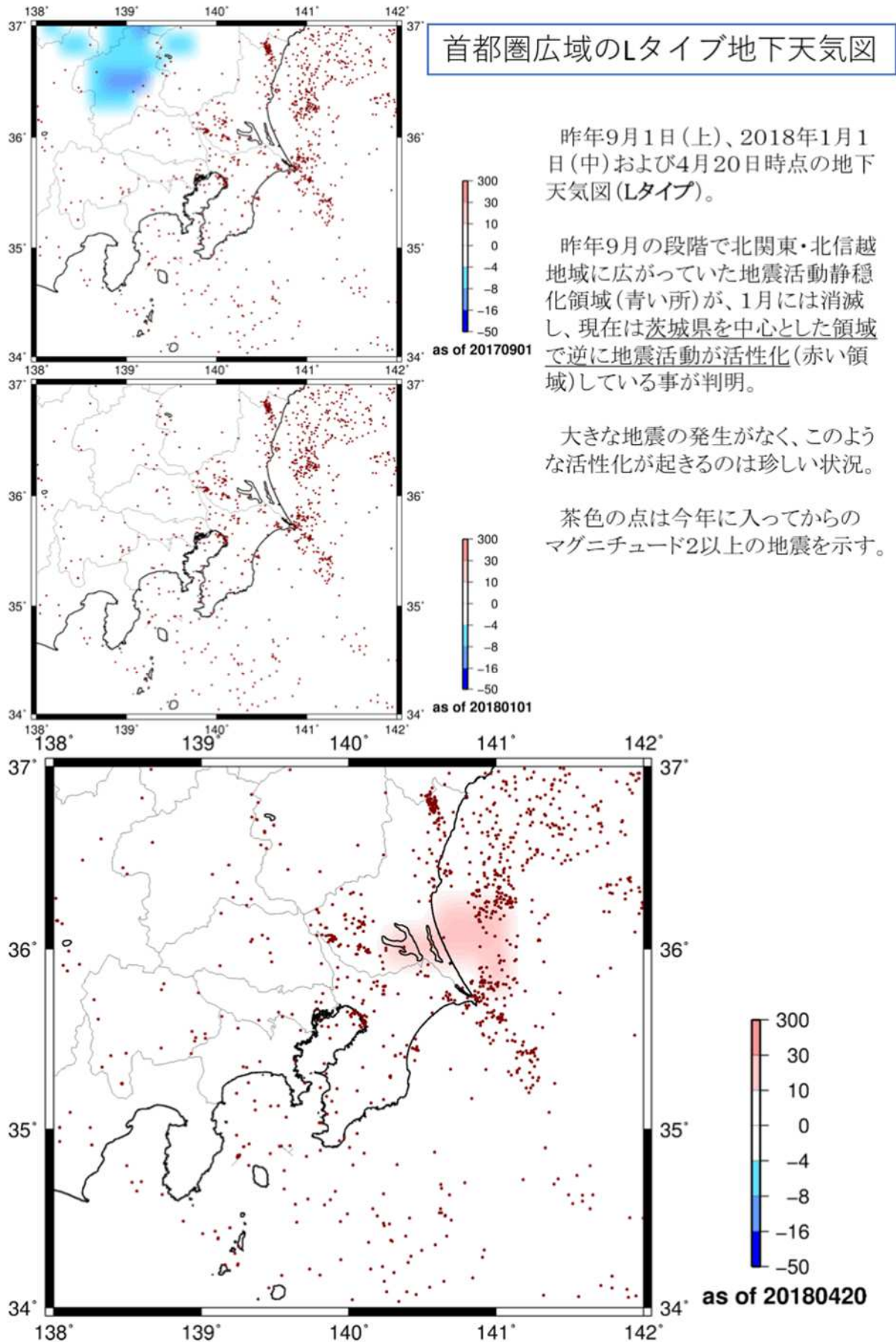
3月12日のニュースレターに引き続き、首都圏の地下天気図解析です。2011年の東日本大震災直後は、首都圏も非常に地震活動が活発化していましたが、それが昨年にはかなり以前の状態に近づいてきました(それでも全体としての地震発生数は311以前より増えています)。

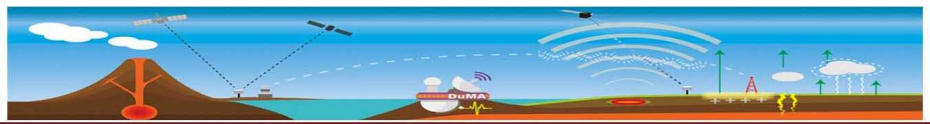
首都圏(東京)は南から沈み込んでいるフィリピン海プレートが地下20kmほどの所に位置しており、さらにその下側に東側から沈み込む太平洋プレートが100kmほどの深さに位置しています。世界でも極めて珍しい地下構造の上に、数千万人の人が暮らしています。地震はプレート境界で基本的に発生しますので、首都圏は過去の歴史を見てもわかりますように、地震災害からは避けられない宿命を持っています。



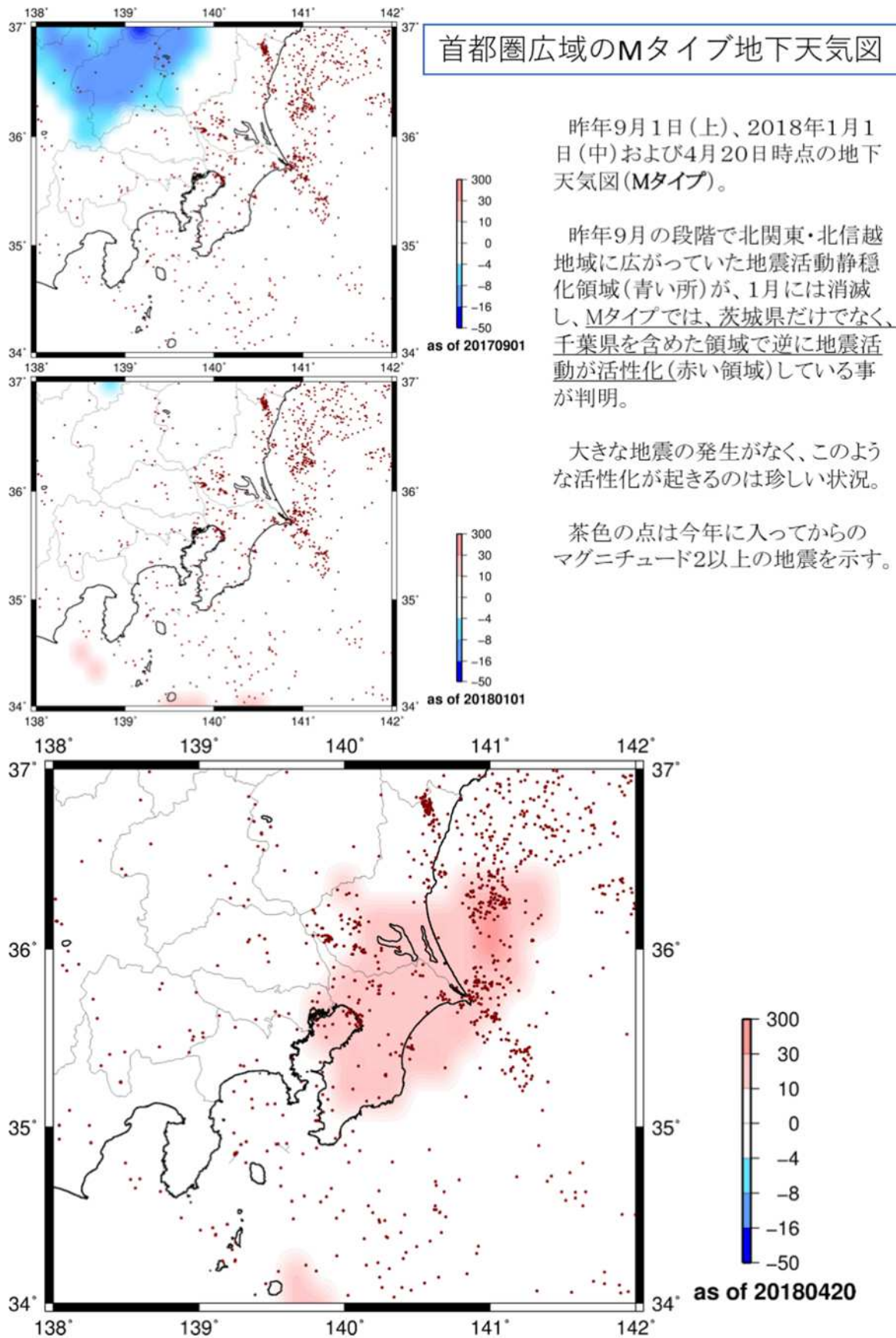


地下天気図は今回も L タイプと M タイプの順にお示しします。





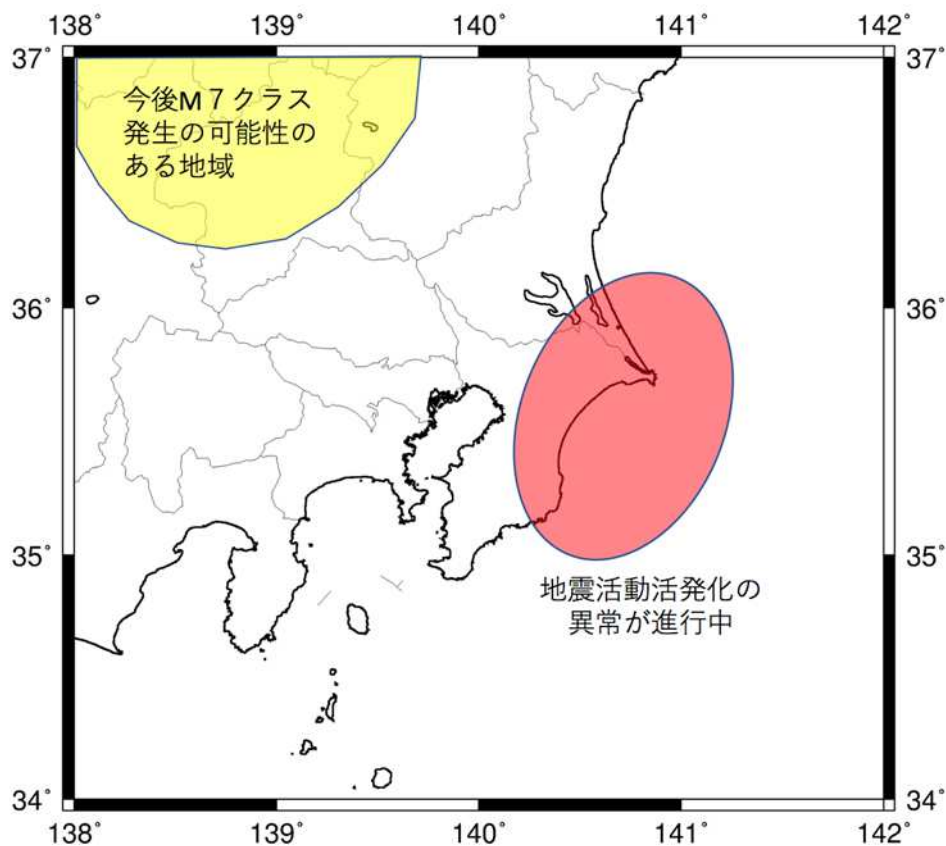
次はMタイプの地下天気図です。





現時点での首都圏の地震活動の解釈

これまで、北信越地域での地震活動静穏化を報告してきましたが、これが昨年12月ごろにはほぼ解消した事がわかっています。従いまして、この静穏化の異常が本物であれば、静穏化終了後1年程度(2018年12月頃まで)は、十分に警戒する必要があると考えています。



また房総半島沖では、地震活動の活発化の異常が観測されています。DuMA では主に地震活動静穏化に着目して解析を行っていますが、活発化も大地震につながる例がある事は、過去にも確認されています(例えば東日本大震災の前にも、将来の破壊開始点から内陸にかけて地震活動が活発化していました)。ちなみに、この房総半島沖では30年ほどの周期で被害地震が発生しています(前回は1987年12月にM6.7が発生)。

現在明らかに関東地方(特に千葉県から茨城県沖にかけての地域を含む)の地震活動に変化が生じて来たことは確実です。